

1年生 国語総合(古典) について

1年生国語総合(古典)について、2単位(A、C、Gルーム)も3単位(Bルームのみ)も中間考査の範囲は変更しません。考査範囲を再掲します。

国語総合(古典)【2単位】  
A・C～Gルーム 第1学期中間考査範囲

『児のそら寝』教科書P230～231

漢字が読める 現代仮名遣いに直せる 語句の意味が分かる  
現代口語に直せる 文章全体が理解できる 簡単な古典文法が理解できる等々  
(演習プリント参照)

「古文を読むために①」教科書P232～233

「いろは歌」を言うことができる  
ワ行・ヤ行が書くことができる等々

「古文を読むために②」教科書P236～237

単語を10品詞に分類することができる 活用形を言うことができる  
係り結びが理解できている等々

国語総合(古典)【3単位】  
Bルーム 第1学期中間考査範囲

『児のそら寝』教科書P230～231

『絵仏師良秀』教科書P234～235

漢字が読める 現代仮名遣いに直せる 語句の意味が分かる  
現代口語に直せる 文章全体が理解できる 簡単な古典文法が理解できる等々  
(演習プリント参照)

「古文を読むために①」教科書P232～233

「いろは歌」を言うことができる  
ワ行・ヤ行が書くことができる等々

「古文を読むために②」教科書P236～237

単語を10品詞に分類することができる 活用形を言うことができる  
係り結びが理解できている等々

●考査範囲の最後の部分が説明しきれなかったクラスについては、教科書を読んで確認していただく下さい。

●文法演習プリントが配布できなかったクラスについては、月曜日に各クラスで配布してもらいますが、同じものを以下にPDFで掲載しておきます(添付資料①)。

解答(添付資料②)も掲載しますので、そちらも確認しておいてください。

●Bルームについて、「絵仏師良秀」の口語訳を以下にPDFで掲載します(添付資料②)。確認しておいてください。

## 基本練習

五十音図のワ行を、平仮名・歴史的仮名遣いで書け。

二次の歴史的仮名遣いで書かれた語を、現代仮名遣いで書け。

- |              |   |              |   |
|--------------|---|--------------|---|
| 1 かむなづき(神無月) | 「 | 2 まゐる(参る)    | 「 |
| 3 にほひ(匂ひ)    | 「 | 4 くわんぱく(関白)  | 「 |
| 5 はつはる(初春)   | 「 | 6 をみなへし(女郎花) | 「 |
| 7 けふ(今日)     | 「 | 8 おうな(嫗)     | 「 |
| 9 あふぎ(扇)     | 「 | 10 をしう(惜しう)  | 「 |

三次の太字の語の意味を、辞書を引いて調べよ。

1 現代語にないもの(古文特有の語)

- |            |          |         |       |   |
|------------|----------|---------|-------|---|
| いざい        | かいもちひせむ。 | (二三〇・一) | かいもちひ | 「 |
| 念じて寝たるほどに、 | (二三二・二)  | 念ず      | 「     |   |

2 現代語と意味の違うもの(古今異義語)

四次の文章を口語訳するにあたって、空欄にどのような助詞や主部(主語)・目的部(目的語)を補うとよいか。文章の意味をよく考えてそれぞれ答えよ。

○今は昔、竹取の翁たけとりのおきなといふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。(二三八・一)

訳 今いまはもう昔の話だが、竹取の翁たけとりのおきなという者もの「イいた。ィ」ウ野山に分け入って竹を取っては、「ィいろいろなことに使った。

五次の文は『徒然草』の一節で、「ものの道理や情趣を理解しないと思われる者でも、ときにはよい一言を言うものである。」という意味である。傍線部1～5の品詞名を書け。

○心1なしと見ゆる者2も、よき3ひと4と言ふもの5なり。

1 「」 2 「」 3 「」 4 「」 5 「」

六活用する語に、打消の助動詞「ず」をつけると未然形になり、助詞「て」をつけると連用形になる。また、名詞「時」をつけると連体形になり、助詞「ども」をつけると已然形になる。次の語を、空欄に合う形にそれぞれ活用させよ。

- |      |   |   |   |   |   |
|------|---|---|---|---|---|
| 1 吹く | 「 | 「 | 「 | 「 | 「 |
| 2 着る | 「 | 「 | 「 | 「 | 「 |
| 3 起く | 「 | 「 | 「 | 「 | 「 |
| 4 死ぬ | 「 | 「 | 「 | 「 | 「 |

七口語文法で仮定条件を表す仮定形の位置が、文語文法では確定条件を表す已然形となる。次の太字の意味を、あとのア～エの中からそれぞれ選べ。

1 東の風吹かば、花も咲かむ。 「

2 今日けふは北の風吹けば、船を出ださず。 「

ア 吹くと イ 吹くので ウ 吹いたら エ 吹いても

八文中に助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」があるときには文末の活用語は連体形で結び、「こそ」があるときには已然形で結ぶ。この法則を「係り結びの法則」という。次の文の中から、「ぞ」の結びとなる連体形の語と、「こそ」の結びとなる已然形の語をそれぞれ抜き出せ。

1 空には、黒き雲くろきぐもぞはやく流るる。「ぞ ↓ 「

2 今宵こよひの月つきこそおもしろく見ゆれ。「こそ ↓ 「

**留意点**

● 歴史的仮名遣いの読み方

① 「あ・ゑ・を」「ち・づ」は「イ・エ・オ」「ジ・ズ」と発音する。

・男をとこ↓オトコ    ・恥はづかぢたり↓ハジタリ

② 語中や語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」と発音する。

・川かは↓カワ    ・あはれ↓アワレ

ただし、語頭に「は・ひ・ふ・へ・ほ」を持つ語が、他の語の下について複合語となる場合を除く。

・月つき日ひ↓ツキヒ    ・岩いはな鼻はな↓イワハナ

③ 長音で発音する場合は次のようになる。

(1) 「あう・あふ」がオーとなる

・奥あう羽う↓オーウ    ・逢あふ坂か山やま↓オーサカヤマ

(2) 「いう・いふ」がユーとなる

・優いうなり↓ユーナリ    ・言いふ↓ユー

(3) 「えう・えふ」がヨーとなる

・要えうず↓ヨーズ    ・蝶てふ↓チョー

(4) 「おう・おふ」がオーとなる

・応おうず↓オーズ    ・思おもふ↓オモ

④ 「む」は「ン」と発音する場合があります、「くわ・ぐわ」は「カ・ガ」と発音する。

・咲くわきなむ↓サキナン    ・管くわん弦げん↓カンゲン

● 単語

心なしと 見ゆる 者も、よき ひとこと 言ふ ものなり。

このように、文を、音読して不自然にならず、また意味もわかりにくくならないように小さく区切った単位を、**文節**という。文節をさらに分けると、

心なし と 見ゆる 者 も、よき ひとこと 言ふ もの なり。

となる。文節を作っている、意味を持った一つ一つの言葉を、**単語**という。

● 活用

単語の中には「者」「も」のように語形が変わらない語と、「見えず」「見ゆ」「見ゆる者」「見ゆれど」のように語形が変わる語とがある。

語形が変わることを**活用**といい、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の六種の活用形がある。

● 品詞の種類

「心なし」「見ゆる」「者」「よき」「ひとこと」「言ふ」「もの」のように単独で文節となりうる単語を**自立語**といい、「と」「も」「なり」のように単独では一つの文節とまらない単語を**付属語**という。自立語には動詞・形容詞・形容動詞・名詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞があり、付属語には助動詞・助詞がある。この十種類の品詞は口語文法と同じである。

## 基本練習

一 わ・ゐ・う・ゑ・を

## 【補足説明】

「ゐ・ゑ・を」について、(1)「イ・エ・オ」と発音できること、(2)「ゐなかびと(田舎人)」は「いなかびと」、「さえもん(左衛門)」は「さえもん」、「さをとめ(早乙女)」は「さおとめ」と読めること、(3)これらを現代仮名遣いで書けることは、古文を読むために必要なことである。

しかし、「左衛門」を歴史的仮名遣いで「さえもん」と書くか、「さえもん」と書くか、ということまでは必要ない。古文で創作するとはほとんどないからである。

ただし、「居る・率る・用ゐる・率ゐる」のワ行上一段活用動詞、「植う・据う・餓う」のワ行下二段活用動詞については、活用語尾との関わりから、文法上覚えておくことが求められる。

## 二 1 かんなづき

2 まいる

3 におい

4 かんぱく

5 はつはる

6 おみなえし

7 きよう

8 おうな

9 おうぎ

10 おしゅう

## 【補足説明】

下段の「歴史的仮名遣いの読み方」を参照。1は④、2は①、3は②、4は④、5は②、6は①と②、7は③の③、8は③の④、9は③の①、10は①と③の②に注意する。

「ぢく(地獄)↓じくく」「とぢて(閉ぢて)↓とじて」「はづかし(恥づかし)↓はずかし」と違って、1の「かむなづき(神無月)↓かんなづき」は「月」が濁音化したものであり、歴史的仮名遣いではないことに注意する。5は「はる(春)」が複合語となったものである。8の「おうな」は「オーナ」と音読するので、現代仮名遣いも「おうな」となって、変わらない。

ただし、次のような例外もある。

・仰ぐ↓あおぐ ・葵↓あおい ・希有↓けう

・甚だ↓はなはだ

三 1 ぼたもち 2 我慢する

## 【補足説明】

古文には、「北の方」(正妻や「やむごとなし」(高貴ダ)のように、現代では用いられなくなった言葉や、「いろいろ」(色トリドリ)や「ふびんなり」(不都合ダ)のように、用いられていても意味が変わっている言葉がある。古文を読解するためには、辞書を引いて言葉の意味を調べることが大切である。

四 アが イ(その)翁は ウその竹を

## 【補足説明】

古文には、主語を表す助詞「が」や目的語を表す助詞「を」が省略されていることが多い。「者が」「竹を」はその例である。「その」翁は」は、主語の省略の例である。助詞「て」などの単純接続で下に続く場合は、

○男、もとの女をたづね行きて、二時ばかり語らひにけり。(男ハ、昔ノ女ヲ訪ネテ行ツテ、男ハ、約四時間グライ親シク話シタソウダ。)のように、主語が変わることは少ない。しかし、助詞「ば」や「に」などのあとでは、

○男、もとの女をたづね行くに、すでに失せにたり。(男ハ、昔ノ女ヲ訪ネテ行ツタガ、女ハ、ステニ姿ヲ消シテシマッテイタ。)のように、主語が変わることが多い。

- 【五】 1 形容詞 2 動詞 3 助詞 4 名詞 5 助動詞

【補足説明】

自立語で活用があり、単独で述語となることが出来る語を用言という。用言の中で、1の「心なし」のように性質や状態を表し、言い切ると「し」で終わる語を形容詞という。また、用言の中で、2の「見ゆる」のように動作・作用・存在を表し、言い切るとウ段で終わる語を動詞という（「あり・をり・はべり・いまそかり」はイ段で終わる）。

付属語で活用のない、3の「も」のような語を助詞といい、付属語で活用のある5の「なり」のような語を助動詞という。

4の「ひとこと」のように、自立語で活用がなく、単独で主語となることが出来る語を名詞という。「このひとことがなければ」のように、助詞「が」をつけることができる。

【六】 1 吹か・吹き・吹く・吹け

2 着・着・着る・着れ

3 起き・起き・起くる・起くれ

4 死な・死に・死ぬる・死ぬれ

【補足説明】

1は「か・き・く・け・け」と活用する四段活用であり、2は「き・き・きる・きる・きれ・きよ」と活用する上一段活用である。3は「き・き・く・くる・くれ・きよ」と活用する上二段活用であり、4は「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」と活用するナ行変格活用である。

【七】 1 ウ 2 イ

【補足説明】

1の「吹か」は未然形であり、「吹かず」（吹カナイ）・「吹かば」（モシ吹イタラ）・「吹けばや」（吹イテホシイモノダ）のように、打消・假定・願望など、未だ実現しない動作を表す。2の「吹け」は已然形であり、「吹けば」（吹クノデ）のように、確定条件（原因・理由）など、すでに実現した動作を表す。

【八】 1 流るる 2 見ゆれ

【補足説明】

1は「はやく・流るる」、2は「おもしろく・見ゆれ」と単語に分けられるので、文末（結び）の活用語は「流るる」「見ゆれ」である。前者は「れ・れ・る・るる・るれ・れよ」と活用するラ行下二段活用の連体形であり、後者は「え・え・ゆ・ゆる・ゆれ・えよ」と活用するヤ行下二段活用の已然形である。

## 添付資料③(Bルームのみ)

### 絵仏師良秀 (宇治拾遺物語)

これも今は昔、

絵仏師良秀といふありけり。家の隣より

これも今となつては昔のこと、絵仏師良秀という者がいたそうだ。

家の隣から

火出で来て、風おしおほひてせめければ、

火災が発生して、風が覆いかぶさるように吹いて(火が)迫ってきたので、

逃げ出でて、

大路へ出でにけり。人の描かする仏も

(良秀は)逃げ出して、大通りに出てしまった。人が(良秀に)描かせている仏も(家の中に)

おはしけり。また、衣着ぬ妻子なども、

さながら内にありけり。

いらっしやつた。また、着物も着ない妻や子供なども、そのまま(家の)中にいた。

それも知らず、

ただ逃げ出でたるをことにして、

(良秀は)そんなことも構わずに、ただ(自分が)逃げ出したのをよいことにして、

向かひのつらに立てり。

(大通りの)向こう側に立っていた。

見れば、すでにわが家に移りて、

煙・炎くゆりけるまで、

見ると、(火は)すでにわが家に燃え移って、煙や炎がくすぶり出したころまで、

おほかた、

向かひのつらに立ちて、眺めければ、

(良秀はその間)ほとんど、向かい側に立って、

眺めていたところ、

「あさましきこと。」とて、人ども来とぶらひけれど、さわがず。

「大変なことだ。」と言って、

人々が見舞いに來たが、

(良秀は少しも)慌てない。

「いかに。」と人言ひければ、

向かひに立ちて、

家の焼くるを見て、

「どうしたのですか。」と人が言ったところ、(良秀は)向かいに立って、家が焼けるのを見て、

うちうなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、しつるせうとくかな。

しきりにうなづいて、時々笑った。

「ああ、

大変なもうけもの(をしたこと)よ。

年ごろはわろく描きけるものかな。」と言ふときに、とぶらひに來たる

長年の間(絵を)まずく描いてきたものだなあ。」と言うときに、

見舞いに來ていた

者ども、「こはいかに、

かくては立ちたまへるぞ。あさましきことかな。

者たちが、

「これはまたどうして、こうして立っておいでなのか。

あきれたことだなあ。

ものつきたまへるか。」と言ひければ、「なんでふもの

怪しげな靈がとりつきなされたか。」と言ったところ、「どうして怪しげな靈が

つくべきぞ。年ごろ、不動尊の火炎をあしく描きけるなり。

とりつくはずがあるうか。長年の間、不動明王の火炎を下手に描いてきたことだなあ。

今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。

今見ると、（火というものは）このようにこそ燃えるものだったよと、悟ったのだ。

これこそせうとくよ。この道を立てて世にあらむには、

これこそもうけものよ。仏画を描くことを専門として世間を渡るからには、

仏だによく描きたてまつらば、百千の家も出で来なむ。

仏だけでも上手に描き申し上げたら、百や千の家だってきつとできるだろう。

わたうたちこそ、させる能もおはせねば、

おまえさんたちこそ、これといった才能もお持ちでないから、

ものをも惜しみたまへ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

ものを惜しんだりなさるのだ。」と言つて、あざ笑つて立っていた。

そののちにや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めで合へり。

そののちであろうか、良秀のよぢり不動とて、今に至るまで人々が称賛し合っている。